

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について－

| | |
|------|-------|
| 区名 | 此花区 |
| 学校名 | 伝法小学校 |
| 学校長名 | 飽田 誠男 |

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・伝法小学校では、第6学年 31名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

調査結果から、平均正答率の全国・大阪市と比較では、国語、算数、理科において下回っている。領域別正答率（対全国比）については、理科の「生命を柱とする領域」以外は全国との差がある。特に国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」、算数の「測定」において全国との大きな差がある。無回答率については、今年度は全国・大阪市よりも高い結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕　すべての領域に課題がみられるが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「読むこと」において昨年度同様に全国との差がある。しかし、「我が国の言語文化」については、全国の平均正答率との差が令和6年度の14.6ポイントから令和7年度が7ポイントと大きく縮まった。「書くこと」については、昨年度から1.6ポイント縮まっており表現方法の工夫を中心とした校内研究を推進した成果といえる。また、漢字能力検定やでんでん漢字検定に挑戦することで、学習意欲が高まり定着しつつある。

〔算数〕　昨年度の全国との正答率を比較すると、すべての領域において差が開く結果となった。今後は「測定」「データの活用」において、日常的に関連する問題に取り組み、問題に慣れることや、収集した情報を活用する経験を積み重ねていく。また、学習者用端末を活用し、既習事項の反復練習をすることで定着を図っていく。

〔理科〕　全国との正答率を比較すると、「生命を柱とする領域」において3.6ポイント上回っていた。しかしそれ以外の領域に課題があるので、児童が主体的に考えて学習する活動を充実させていく必要がある。

質問調査より

「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、PC・タブレットなどのICT機器を、勉強のために使っていますか（遊びなどの目的に使う時間は除く）」「わからないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」の質問について、肯定的な回答をする割合が全国・大阪市よりも高いことから、個別最適な学びに意欲的に取り組んでいることがわかる。また「5年生までの学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、次のことはあなたにどれくらいあてはまりますか。（7）友達と協力しながら学習を進めることができる」の質問に対しての肯定的な回答の割合は、全国・大阪市よりも高い。しかし、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方につけていたりすることができますか」の質問については、全国・大阪市と比べて肯定的な回答の割合が低い。今後は、意欲が結果に結びつくように、自信を持って自分の考えを表現し、友達の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組む児童を育成していかなければならない。

今後の取組(アクションプラン)

今年度も、週1回の「音読タイム」と「読書タイム」を設定し、読む力の育成に取り組んでいる。言語活動の工夫として、教材文を読み進めながら学校図書館の主幹学校司書と連携し、関連図書で並行読書を行うなどする。それぞれ、読んだり調べたりした内容を、言語活動としてまとめ、児童の実態に応じた方法で表現（発表）を行うようとする。学びの場として学校図書館の活用をさらに進めていく。授業においては、個人やグループで情報を整理・分類しながら考えをまとめ、意見交流していく場づくりをさらに充実させていく。同時に、学習者用端末で測定やデータの活用について練習できるコンテンツを積極的に活用していく。児童の学習習慣の形成に向けては、自ら目標を立てて家庭学習に取り組み、振り返る「家庭学習アップ週間」を学期に1回設定した。更なる学力向上のためには、学びサポーター等の人的資源を活用して、放課後ステップアップ学習を効果的に行い、個々の状況に応じた学習支援を行う。